

ドアが無理やり押し開けられると、美しい若者は一步踏み入れ、静かに周囲を見回した。

ここは豪奢に飾られたスイートルーム。まず広いリビングを抜け、照明の導くまま寝室へと進んでいく。

霖は寝室の前で足を止めた。

「霖だよな？ こっちに来て。」

浴衣一枚の森朔がベッドの端に腰掛け、ドア口に立つ若者へと指先で招いた。

だが霖は動かず、ただ黙って森朔を見つめている。その瞳には、温かい笑みと呼べるほどの小さな微笑さえ浮かんでいた。

問い詰めも、叱責も、許しを乞う声もない。

その沈黙に、森朔は思わず息を呑む。今の二人の関係を思えば、これはあまりにも異例だった。

相手の過剰に整った顔立ちを見つめながら、苛立ちを覚えた森朔は、例外的に言葉で説得することにした。

「君はそういう傾向がないけど……これだけで、君の考えは変わると思うよ。」

二人の間に札束が飛び交う。

最近の市場状況を考えれば、それは破格と呼んでも差し支えない取引だった。

話の前提として、霖が本当にこの商売に関わっていて、自分の尻を売ってお金を稼ぐつもりだというもので、その金をしっかり拾い上げ、この気前のいい客を大切にするはず。

しかし、実際には霖は森朔の手下に強制的に誘拐された。

森朔が抱える最悪のフェティッシュは、善良な人を売春婦に追い込むようなドラマを演じるのが好きだ。

「この値段じゃない。」 霖はその人に言った。「もし私に興味があるなら、金だけで逃げられると思うなよ。代償も、きっちり払ってもらおう。」

それはまるで専門用語のようで、若者はあまりにも冷静だった。森朔は、その様子にすっかり興味を失ってしまう。

森朔にとって、叫びも涙もない静かな夜は、ただ退屈なだけだった。

森朔は眉をひそめ、目の前の若者を上から下までゆっくりと眺め、それからわずかに表情を緩めた。

どう見ても、若者は中性的に整った顔立ちで、世間慣れしていない。

森朔が好む、清潔で単純な気配をまとっていた。

扱いやすく、言葉ひとつで動かせてしまいそうな——そんな印象だった。

「この値段なら、お前みたいなのを四人は買える」

森朔は淡々と言い、手にしていた札束をもう一度、床へ落とした。

霖は静かに微笑んだ。

そしてついに一步踏み出し、ベッドの方へ、森朔の方へと歩み寄っていった。

「君の好みは、誰にも染まっていない人だけだった。だが、理想の商品が揃う裏の業界であっても、決して手を伸ばさない。なぜなら、たとえ初心者の名乗っていようと、商品として世に出る以上、それはすでに無数の経験を積み、手練れた者たちが作り上げたものだと知っているからだ。でも、最後の一步を踏み出せなかったただけだ。」

霖は歩きながら言った。

「だからお前たちは、業界の外にまで手を伸ばし、自分たちの好みに合う者を探し出す。」

「見つけたその美しい存在を、相手の意思など一切顧みずに奪い去り、呪いの言葉と、助けを求める叫びを浴びながら、歪んだ満足を貪ろうとする。そして最後には、金で全てを処理しようとする。金で済まないなら、相手が金を必要とするよう仕向け、金のために折れざるを得ない状況へ追い込む——それがお前たちのやり方だ。」

「……本当に、救いようのない人間たちだ。」

霖はため息をついた。

「君はセックスに依存していて、その関係性を使って人を支配しようとする。ならば、どうして金なんだ？」

森朔が息をのむ暇もないうちに、若者の影がふっと近づく。

次の瞬間、森朔の体はベッドの端から強く引き上げられ、視界が反転する勢いで体勢を奪われる。

反射的に腕を動かそうとするが、その動きより早く、霖の手が森朔の片腕を後ろへねじり上げ、体ごとベッドに押し伏せていく。

抵抗の余地は、完全に奪われていた。

優しい名を持つこの美しい若者が、これほど強いとは誰も考えていなかった。

森朔が呆然としているのを見て、霖はその心の動きをよく分かっているように微笑んだ。

「驚いた？ どう見えた？」

少し間を置き、霖は首を傾ける。

「ねえ、どうして僕の名前が『優しい』と思ったの？ あなたなら、その言葉の本来の意味を知っているはずでしょう？」

霖は止まらない雨。

雨は優しいものではありません。

特に、終わりの見えないまま降り続いていくとき。

霖は力が強く、片手だけで下の人を押さえつけ、森朔の抵抗を簡単に封じ、森朔とゆっくり話しながら「なぜ断る?」と尋ねた。無理やりここに呼んで、セックスしに来たんじゃなかった?

セックス?

そう、森朔は霖に無理やりセックスさせたいと認めたけど、強要されるのは全然違うだろ?!

それが森朔の歯の根元に、あの嫌なむず痒さを走らせた。

下にいる人が怒りで歯ぎしりしているのを見て、霖は静かに笑った。片手で森朔のスーツズボンを脱いで投げ捨て、指を口に入れ舌で慎重に唾液を塗りつけ、これは普通の人間の唾液とは違う。

霖の唾液は人間のものとは異なり、彼のホルモンによって作用する特別な物質だ。触れたものに刻印を残すこともできる。

唾液で汚れた指を素早く森朔の入り口を押し当て、冷たさが侵入し、森朔は突然口を開いたが、声を出す前に、これまで使われたことのない場所が侵害さ

れ、森朔は思わず息を呑んだ。

「初めてだから難しいのか」

霖は指で内側を辛抱強くかき混ぜながら、低く独り言をつぶやいた。

初めて使う膣は非常にきつく、内壁はしっかり締まって、ただ押し込むだけでも難しいほど、指の関節を包み込み、先へ進めるのが困難になる。

霖は急ぐことなく、再び唾液を指先に塗り、浅くなぞるように動かし。
そのわずかな刺激だけで、内部がゆっくりと緩み始めた。

やがて森朔の呼吸は荒く、重くなり始めていく。

それはとても悪い気持ちになるはずですが、なぜでしょうか..... どうやら.....
悪くない？

特に指のねじりが楽になると、少し動き始め、関節が内部を擦り、熱い感覚がますます顕著になっている。

私、どうしちゃったんだろう――

森朔はそれが理解できず、考える気にもなれなかった。今は歯を食いしばり、声を漏らさないようにするしかなかった。

ただ、その努力は初めから無意味と決まっている。

柔らかい肉穴は霖の指を止め続けることができず、すぐにその機会を逃さず、指全体を無理やり深みに沈めた。

「ふむ!」

突然の深さに森朔はうめき声を漏らし、続いて素早い息を漏らした。

深い指は止まらず、関節で腸内を支えながら反り返り、内部空間を広げつつ。これまでこんな扱いを受けたことのない柔らかい肉は、すぐに見慣れない酸っぱいしびれを感じ、指は再びねじり始め、熱くなり始めた所をさらに広げた。

「初めてなのに、もうこんなに濡れてる。森さん、才能ありますね。」

霖は淡々とした声で褒めた。

霖の称赞が届いた瞬間、森朔の胸に熱い羞恥と怒気が同時に込み上がる。

反発したい気持ちはあるのに、身体は動かない。

本来なら、こんなに簡単に乱される状況ではないはずなのに。

それでも、内側では抑えようのない別の温度が静かに燃え広がっていく。

お尻の奥深くに..... になる 暑くなってきた.....

この人、何かおかしいに違いない!

「誰かに復讐しに来たのか」

その可能性が森朔の頭に突然浮かび、思考が追いつく前に言葉が断続的にこぼれ、目の前の人物へ向かう。

霖は否定した。

「実は、こういうふうにも解釈できます。

私は、あなたがもっと快適に過ごせるように此処にいるんです。」

森朔は霖の言葉をまるで理解できず、目の前の男に精神的な問題があるのではないかという疑念が胸に浮かぶ。眉をひそめ、低く問いかける。

「いったい何をめちゃくちゃに言っているんだ……」

霖:「めちゃくちゃ? そう、それが君の望みなら。」

森朔の言葉を、霖は自信満々に別の意味へと受け取り。

その勘違いに気づきながらも、森朔は訂正できず。

——霖なら、本当にやりかねない。

その確信が、喉の奥を固く塞ぐ。

この人、めちゃくちゃだ。

「うっ……」

森朔は鼻でかすかに息を震わせ、逃げ場を探すように枕へ顔を押し込む。